

不登校経験を持つ若者たちの もう一つのキャリアパス (1)

はじめに

「希望の教育を求めて」



今から 9 年前に私たちが初めて出会った不登校の中学生は、今大学院で社会学を専攻しながら不登校研究をしています。「得体のしれない不安」に苛まれていた彼は、とうとうその不安を自分の研究対象にして、どこまでもそれを言語化しようと研究者への道を歩み出したのです。

次に出会った中学生は、小中あわせて 2 年間しか学校へ通っておらず、中学に入学してからもほとんど家でひきこもり状態になっていました。人前でなかなか緊張せずに話せなかった彼でしたが、高校そして専門学校と進学し、やがて自動車ディーラーへ就職、第一線で活躍するサービスマンとして働いています。

その他にも、過敏性腸症候群に苦しみ、教室に入ることができず高校を 3 つも中途退学せざるを得なかった女の子。彼女は今、歯科衛生士になるための専門学校に毎日元気に通っています。また、中学高校と不登校を繰り返し、リストカットを常習化させていた女の子。彼女は命の誕生の現場に立ち会いたいということから、助産師として病院で働いています。ADHD という診断の

もと薬を服用しストレスのない生活を送るように指示されていた男の子もいました。彼は、「僕は病人として生きたいわけじゃない。一人の高校生として生きていきたい」というコトバと共に薬をストップすることをドクターに宣言し難関校の受験に見事合格、ADHD という診断から想定されるキャリアとは異なる、いわゆる普通の高校生になっていきました。あるいは学校という世界の閉塞感に耐えられなくなっていった女の子。彼女は不登校になってから、1 年で高認を取得し、その後予備校に通い、現役で難関大学へと進学、今年アメリカの大学に留学する予定なのです。

知誠館には、そんな不登校やひきこもりの経験を持つ若者たちが次々とやって来ます。私たちの前には、夢も希望も持てない状態、あらゆることを試してもうまくいかず、もうこれ以上自分自身の物語を描けなくなった状態で現れてくる若者たちや親たちの姿がありました。しかしそんな彼らも、やがて少しずつ変わり始めます。自分たちが安心できる場と共感してくれる仲間、そして能動的な学びと自信を手に入れ、自分のコトバを使って自分たちの辛く苦しい過

去を希望へと書き換えることを通し、自分の人生を再出発させるのです。彼らの中には、自分自身のことを「生まれ変わった」と表現する者が少なくありません。それはまさに変容のドラマでもあるのです。大きな変容は、感動を伴います。ましてやそこにコトバが媒介し、それが一つの物語となっていく時、その感動は親や家族、やがてはまわりの支援者たちも次々と包み込み、彼ら自身の変容も促していくのです。それはまさに変容の波が人から人へと伝わっていく瞬間でもあるのです。

私たちはそんな彼らの変容を、蝶の蛹(さなぎ)にたとえます。まるですべてが止まったかのように見える蛹の期間。それは今まで青虫の身体を作っていた細胞が次々と死に絶え、それに代わって新しく蝶の身体を作る細胞が次々と生まれていく期間なのです。まさにそれは、新しく生まれくるものための死に行く過程であり、「死と再生」という学びの大きなテーマに向かうダイナミズムでもあります。そして私たちがこの知誠館で見届ける不登校やひきこもりの経験を持つ若者たち、彼らはこの蛹の期間を私たちとともに経験する仲間でもあるのです。

本稿のテーマは、不登校やひきこもり経験を持つ若者たちの「もう一つのキャリアパス」を明らかにしていこうというものです。そこには、従来の若者たちへのキャリアパス、受動的で間に合わせ的なキャリア支援やキャリア教育のあり方に対する疑問や反省が含まれています。この思いはやがて私たちに「キャリアとは何か？」という

問いを突き付けることとなり、結果として私たち自身のキャリア観に再帰していったのです。つまり若者のキャリア形成に関する問題を突き詰めていくと、私たち一人一人が仕事にどういった意味を見出しているのか、あるいは働くということがいったいどういうことなのか、という私たちの労働観までもが問われることになっていったのです。

不登校やひきこもりといった若者の問題は、下手をすれば個人の問題としてだけ処理されてしまいます。例えば、発達上の課題や人格上の課題、あるいは精神病理の課題として、処理されていくのです。しかし個人は家族の中で形成され、家族は社会の中で形成されていきます。この前提に立てば、問題を持った個人の前に問題を持った家族があり、問題を持った社会があると考えられるのではないのでしょうか？

私たちはあえて不登校やひきこもりという問題をひとつの窓として捉え、そこから家族や社会の抱える課題を見てみようと考えました。もちろんそこに個人の課題が存在しないとは考えていません。ただそこには、社会の課題も存在するのではないかと考えるのです。問題はいつも関係性の中に生じます。従って、個人の課題を考えるのと同じように、不登校やひきこもりといった問題を通して、家族や社会の課題に目を向けていくことが大切であると考えたのです。

本稿では不登校やひきこもりの経験を持った若者たちが、他者とのかわりの中で

大きく変容する様子をさまざまな語りを介したエピソードとして紹介していきます。そしてその変容が、彼らのキャリアそのものを切り拓き、能動的なキャリア形成を可能にするといった事実を示すことができると考えています。受動的なキャリア形成から能動的なキャリア形成へという移行が、この「もう一つのキャリアパス」というテーマに託された思いでもあるのです。

具体的に第1章では、現代社会におけるキャリア形成の難しさを構造的に説明すると共に、キャリアそのものへの問い直し、あるいはキャリア支援やキャリア教育そのものへの問い直しを試みつつ、その構造的課題の突破口となり得る語りの世界の可能性に触れてみたいと思います。続く第2章では、知誠館に学ぶ不登校やひきこもり経験を持つ若者たちが、「森の語り場」と呼ぶセッション場面で自分のライフストーリーを書き換えていくというエピソードを取り上げ、若者たちの変容とその場における他者の役割について考えてみたいと思います。さらに第3章では、若者支援に関わる援助者たちの学びの場として組織された「南丹ラウンドテーブル」の記録をエピソードとして取り上げ、その場における援助者たちの揺らぎを捉えると共に、このラウンドテーブルに当事者である若者たちが参加することで、場全体に大きな変容が生じていくといった事実注目してみたいと考えています。ここでは、援助ー被援助という関係が問い直されることになっていきます。そして最後の第4章では、もう一つのキャリアパスとして「出会い」を取り上げ、若者たちが消費的な社会に巻き込まれていくの

ではなく、出会いを通してより能動的で生産的、あるいは文化的な社会へとつながっていくことの大事さを考えてみたいと思っています。

教育の場は、いつも限定的な場です。私たちは限られた時間軸の中で若者たちと出会い、互いに影響を及ぼし合い、そしていつかは離れ離れになっていきます。それはまさに「出会い」の関係であり、一過性の関係と言えるのかもしれませんが。私たちには、彼らの人生を決定づけるようなことはできませんし、その未来を描くことなんてなおさらできません。ただ、自分の人生の物語をもうこれ以上描けなくなった若者たちが、やがて「学び」ということを手掛かりにして再び希望に向かって歩き出すことについて、少しばかりのお手伝いができればと思うのです。ブラジルの教育者であったパウロ・フレイレが、かつて抑圧された人々に対しておこなった識字教育のように、それはささやかなかたちでの「希望の教育」なのかもしれません。

